

新
シリーズ

農業経営者ルポ

「この人この経営」

第1回

緑の牧場から食卓まで

株式会社 埼玉種畜牧場
代表取締役

笹崎達雄さん（83歳）

〒350-1221
埼玉県日高市大字下大谷沢546
☎0429-89-2221

【プロフィール】

大正5年、長野県生まれ。昭和15年、東京高等農林学校（現・東京農工大学農学部獣医学科）卒業。同年、陸軍獣医学部将校として戦地へ。昭和21年に帰還後、（株）埼玉種畜牧場を創設。以後、家畜の育種改良につとめ養豚技術の発展に多大な功績を残す。また独自の経営理念のもとでミートピア事業を展開、生産からサービスまでを貫く完全一貫経営の農業を提唱、実践しつづけている。著書に『養豚大成』『ミートピア創造の詩』『樂農文化の時代』『樂農』革命～農業再生が日本を救う』など多数。



完全一貫経営のミートピア事業

通称“サイボク”。東京都心部から電車で1時間圏内の場所に、埼玉種畜牧場はある。笹崎達雄社長は今年83歳。氏が記した全18巻の『養豚大成』は、世界各国で翻訳・出版され、初版から40年以上を経た現在もロングセラーを続ける養豚のバイブル。そんな業績からもわかるように、この世界で名を知らぬ者はいない権威者。それが笹崎という人だ。

しかし、この人の足跡は、そんな偉業さえも凌駕する在野の輝きに満ちている。終戦でフィリピンから復員後、ここ日高市で裸一貫から養豚牧場を始めた。以来、絶え間ない育種改良と飼養管理技術の開発に取り組み、ついに国内養豚産業をリードしてきた。自社銘柄の原料肉『ゴールデンボーグ』『スープ・ゴールデンボーグ』の絶妙な味は、テレビのグルメ番組でも話題になつた。隣接する自社工場で加工したオリジナル商品は、国際ハム・ソーセージ大会で数々の金メダルを獲得している。「緑の

創刊以来、この農業経営者ルポは本誌編集長昆吉則が執筆を担当して参りましたが、今回から始まる新シリーズでは昆を含めた複数の執筆陣による競作の形での連載とし、様々な視点から本誌が注目する農業経営者の人と経営を紹介して参ります。

牧场から食卓まで。これが私の経営のスローガンです。製・販・サービス一貫の際崩し経営を開拓する第4次産業としての農業。夢のあるミートピア事業に挑んできました

張りのある声と澁刺とした態度に年齢を忘れる。ミートピアとはミート（肉）とユートピア（樂園）を合わせた 笹崎社長の造語である。そして、この言葉が私たちの目に映るサイボクの姿を象徴している。何しろここには、マイカーが列をなすほどの消費者が集まつてくるのだ。つまり養豚牧場としての埼玉種畜牧場は完全一貫経営の川上にすぎず、その下流には農業の概念を覆す革新的な事業展開がある。

といつても一つ一つの要素を見れば特に目新しいわけではない。それはハム工場であり小売店や外食店の経営だ。それらをつなぐ空間演出と、人々を集めさせるための仕掛けにも工夫はあるが、度肝を抜かれるほどではない。しかし、初めてサイボクを訪れるとき驚きを禁じ得ない。日本の農業に少しでも問題意識を抱く者は、感動する覚えるだろう。なぜなら、生産者の苦悩や農業への逆風など微塵も感じさせない活気が、ここには溢れているからだ。では、その活気を生み出しているものは何なのか。

笹崎社長は完全一貫経営のことについて、「農業のリエンジニアリング」とも表現する。つまり、農業と農業に関連する事業のプロセスを組み直して、新たな価値を作り上げる。そういう意味になるだろう。生産や小売など、それ自



本社と同じ敷地内にある「サイボクハム本店」。自家生産の肉やハム・ソーセージ、デリカ食卓供給パンなどを生産している。「緑の牧場からきたるへ」を合言葉に“新鮮・美味・安心”をし続ける。転勤などで遠方に引っ越してくるも、通販やインターネットで注文してくれる。

体は当たり前の要素を“農業”として連結・統合することで、一気に農業の風景を変えてしまったのがサイボクだ。そして、この新しい風景に共鳴して集まる消費者たちが、活気という日の光を注いでいるのだ。

ほんらい農業というのは 絵になる仕事なんだ

3年ぶりに 笹崎社長にお会いするため、関越道を下りてサイボクへ向った。「サイボク」の案内表示に従つて進むと、緑豊かな田園地帯の中に駐車場を示す『P』の文字が見えてくる。第1駐車場だけで300台、第2、第3を合せて600台の収容が可能な大駐車場を完備している。その向こうには、広大な敷地内にある直営ミートシヨップや直営レストランが見える。ショッピングでは自家製造の豚肉などの商品を、レストランでは自家生産の肉を食材にしたメニューを提供している。

カフェエティアやリング園、アスレチックなど、他にもさまざまな施設が並ぶ。オープニングエアのベンチに座つて名物の“串トラン”をほおばつたり、庭園に敷き詰められた全国の銘石や銘木を眺めたり、親子連れや老夫婦、若いカップルなどが思い思いにくつろいでいる。

つい“牧場”であることを忘れてしまって、奥まった場所にある日高牧場には約1000頭の原種豚がハイテク設備で飼育管理されている。それを 笹崎社長は「世界最高の技術と最新鋭設

備で管理するボタン農業」と呼ぶ。ちなみに牧場は日高の他に、約3万頭の肉豚を飼育する日本最大規模の東北牧場（宮城県）と埼玉県内の鳩山牧場がある。いずれもコンピュータで管理されるハイテク豚舎が備わり、極限まで人手を省いているのが特徴だ。

しかし 笹崎社長の農業人としての視点は、生産性やコスト競争力にあるわけではない。「技術革新や合理化に取り組むのは当たり前だ。それは経営者として永遠の課題だが、アメリカには日本の183倍の農地があるんだよ。自由化の波を乗り越えて生き残るには、夢のある農業、絵になる農業を創造しなくてはいけない。豊かな農業文化、美味しい食文化、楽しい生活文化。この3つを創造することが我社の社です」

たしかに消費者の立場から見れば、生産者としての技術的ノウハウや設備力など関係ない。ここに居ると楽しい（もちろん美味しい物を食べられることも含めて）。それが重要なのだ。昨年1年間の来客数は380万人。農畜産物の自由化や長期不況の波をかぶることもなく、年間で数10億を売り上げる。デパート等にも7つの支店を出しているが、大手食品メーカーや輸入品の低価格攻勢にもかかわらず供給が追いつかない人気ぶり。値引き一切なしの条件でも、小売業者は取引きを歓迎するという。

消費の二極化が指摘される昨今、サイボクは明らかに「本物」を志向する側にいる。それを 笹崎社長は「うちは

必需品ではなく必欲品を売つているのですよ」と説明する。ちょうど夕食のおかずを買いに来ている主婦がたくさんいた。ふつう私たちは、その買物の品を「必需品」の範疇に入れる。しかし川上の技術力は必欲品に変わる。

必欲品だから並ぶ敵がない。だから
らますます顧客が集まつてくる。私自
身、ここを取材で訪れるたびに買物を
して帰る。あの味を覚えているし、ぶ
らぶらと買物をしたくなる雰囲気があ
る。まるで農業の「銀ブラ」だ。サイ
ボクは農業の新しいパラダイムを提示
している。そこまで言つても、けつし
て過言ではないと思う。

アグリトピアから 農業、テイズ二ーランドへの挑戦

笛崎社長は自ら実践してきたミートピア事業を含めて、農業全体のアグリトピア化を提唱している。



駐車場の向こうに見えるのが300席あるレストラン。地域住民を中心に幅広い顧客に支持され、はとバスの指定コースにもなっている



手作りのフランク焼きなどオリジナリティのある軽食を用意したカフェテリア。天気の良い日は、広場のベンチでくつろぐ家族連れやカップルの姿も目につく

フで農業法人を作ればいいんだ。全農家の70%から75%くらいが、このようないくつかの農業法人が、このように第4次産業を担うことになる。これが私の描く21世紀の日本農業です」

実はそのプロトタイプともいえる試みが、サイボクの中で始まつた。今年4月1日にオーブンした「樂農ひろば」だ。ここでは地元産の有機野菜、果物花きなどを、地元の生産者とともに組織した「樂農心友会」が中心になつて販売している。そのルーツは從来サイ

「米などの主食を担う専業農家は現在の10分の1くらいに削減する。そして1戸あたりの耕地面積を広げて、30～50ha規模の大規模農業を行う。もちろん企業経営でね。そして兼業農家は作目別に再編して、フードピアやフルーツピア、フラワーピアなどを創造する。特産地化した営農集団をつくって、製・販・サービス一体の完全貫経営を行う。我々のような大規模でなくていい。改名から0名へらいのスマッ

完全一貫経営の第4次産業の先には、さらにアメニティという意味での魅力を高めた第5次産業としての農業がある。それを私は“農業デイズニーランド”と呼んでいます。自然という素晴らしい資源をもつ農村には、東京デイズニーランドに負けないくらい人々を惹きつける魅力があるのです」

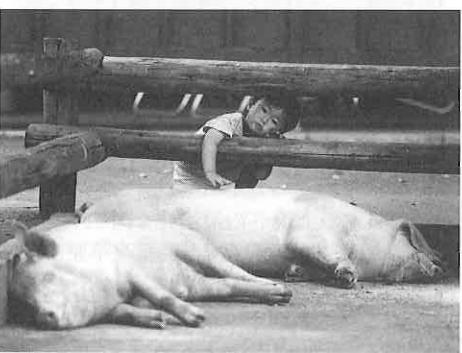
実現のためには敷地を拡大する必要がある。そのため現在、隣接地の購入

また近い将来、首都圏の大動脈である国道16号線に沿って圏央自動車道が完成する。そしてインターがサイボクの近くにできる。圏央道は東名高速、中央道、関越道、東北道と結ばれ、成田空港、千葉、木更津、東京湾とも橋または海底トンネルで結ばれる。商圈の飛躍的な拡大を見込んで笹崎社長は次のシナリオを温めている。

陳列面接は直売コーナー時代の3倍。野菜だけだったものに果実、花きが加わり、近く茶房もオープンする。第4次産業としてのアメニティが次第に現実味を帯び始めたようだ。

ボク内にあつた野菜直売コーナーで、笛崎社長が地元の農家に声をかけて21年前にスタートしたものだ。この部門だけで年間数億円以上を売るほどの実績を上げてきた。

「ウチで飼養している豚や肉牛の糞尿を、有機肥料として地域の農地に還元して有機野菜を生産していただく。そして地域の方々に供給して行く。これまで試みてきた循環農業が、新たな段階に入つた」。そう言つて自信をみなぎらせる。



豚を放し飼いにしている「トントンハウス」は子供たちに人気

「紙のお札も鉄の自動車も食べられる
いでしようが」

う。農業こそが人間の叡智を結集させ
て取り組むべき総合産業なのだという
自負が、創業53年の年輪とともに体中
から滲み出てくる。そんな希代の経営
者は未来を見据えて言う。
「やればできる。できないのは、やら
ないからだ。これが私の信念です」
1年365日、今でも社長室に顔を
出さない日はない。
（吉田典生）

入を検討しているという。いすれば農業をキーワードにした公園やテーマパーク、博物館、図書館をと、壮大な夢が広がる。言葉だけなら誇大妄想に思えることも、サイボク53年の実績の前では期待と共感に変わる。農業を「実現可能な夢」として語れる 笹崎マジック……いや、 笹崎社長は比類なき農業人だが魔術師ではない。

「紙のお札も鉄の自動車も食べられな
いでしようが」

「食」の生産者としての誇りが、この人のエネルギーを生み出す根原などと思

吉田典生：1963年生まれ。放送、出版業界を経て、現在、自称クリエイティブライター。近著に「アンチ大企業！—強い中小企業の徹底研究—」がある。